

有吉佐和子
和宮様御留

有吉佐和子
和宮様御留

講談社

かすのみやまおとめ
和宮様御留

昭和五十三年四月 十日 第一刷発行
昭和五十三年五月二十二日 第五刷発行

著 者 有吉佐和子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号一―二―
電話東京〇三九四五―二―二（大代表）／振替東京八一三九三〇

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 九八〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません
© Sawako Ariyoshi 1978, Printed in Japan

目次

その一	万延元年六月三日	7
その二	万延元年六月二十日	25
その三	万延元年八月十三日・十四日	45
その四	万延元年九月二十七日	70
その五	万延元年十月十七日	94
その六	万延元年十二月九日	111
その七	文久元年四月二十一日	130
その八	文久元年四月二十三日	148
その九	文久元年六月十九日	173
その十	文久元年七月二十八日	190

その十一 文久元年八月四日 209

その十二 文久元年十月八日 237

その十三 文久元年十月十九日・二十日 255

その十四 文久元年十月二十三日より二十七日・十一月四日 276

その十五 文久元年十一月九日・十日 293

その十六 文久元年十一月十四日・十五日 311

その十七 文久元年十一月十四日・十五日・十六日 329

その十八 明治十年九月一日・二日 347

あとがき 368

装幀 大泉 拓

見返し古地図 御築地内図
天保十三年（一八四二）以降嘉永
三年（一八五〇）以前 寿徳堂刊

和宮様御留

その一

客来が終つて、内裏へ帰る人々の足音が門から遠のいて行くのを、フキは厨の片隅で息を詰めて、耳を澄まして聴いていた。屋敷に客のあるときは、下使いの者どもは口をきいても音ひとつ立ててもいけないのだった。フキは年上の婢を見て、もういいのだと悟ると、手桶を右手で握み、暗い家から外へ飛び出した。夏が来ていた。陽光を切るように走って、フキは井戸へ着いた。十数軒の公家屋敷が共有している井戸だが、今日は珍しく無人で、四本の柱が古びた茅葺きの屋根を支えている。その上に鮮やかに青い夏草が生えていた。梅雨があけたばかり、十分の水を得た後で、緑が勢よく繁っている。あんなところにも草が茂るのかと、見上げてフキは心染しくなつた。道端に生えているのと同じ草が、頭の上よりもっと高いところで繁っている。フキは夏が好きだった。勤めが変わって日も浅いせいで、何を見ても珍しく、面白かった。これまで働いていた町方の家と、今の暮しでは見るものも聞くことも何もかも違っている。面喰うことばかりだけれど、フキは毎日が楽しかった。

釣瓶を井戸に投げ落し、力を入れて引上げる。フキは、顔を赤くして、水の一杯入った釣瓶を井戸べりに乗せ、それを両手で抱え直して、手桶に勢よく空けた。冷たい水が音をたてて手桶の

中で逆立ち、フキの足を濡らした。氣持がよかった。また釣瓶を落し、力一杯で水を汲み上げ、また勢よく手桶に水を空けると、前より盛大に水が逆立って、フキの膝から下が才浸しになった。フキは快い冷たさに踊るように足拍子を取り、一人で声を上げて笑い出した。前の町方の家では働く者の数が多く、喋ったり笑ったりして暮していたのが、勤めが変ってからは、万事勝手が違って、フキのように若い娘は他にいない。家の中の暗さは、人間まで憂鬱にさせるのか、声をたてて笑うことなど絶えて無い様子だった。話相手もないままに、フキは水汲みをするときが一番楽しく晴れやかになる。第一に明るい。日中は何度でも井戸に通って厨の水甕を盈たしておくのがフキの仕事だった。十四歳の年齢が、家の中の暗さや寂しさに耐えられなくなったとき、フキはいつも手桶を提げて井戸へ走る。

釣瓶の水は何杯あけても手桶が盈たされることがなかった。フキがあまり勢よく水をあけるので、手桶から湧き出るように水が溢れ、フキの足を濡らし、手桶の中は七分目以上にはならない。しかしフキは承知で、水と戯れているのだった。夏の光。冷たい水。フキは出来ることなら大声で唄いたところだった。あと二、三日で祇園さんがある。そう思うだけでコンコンチキン、コンチキチンというお囃子の鉦の音が聞こえてくるようだった。公家奉公では八坂神社の祭礼に暇をくれるかどうかなどと思案するような齡ではなかった。

ようやく手桶に水を盈たすと、フキは両手で持ち上げ、うんうんと唸りながら駈けて戻った。水は手桶の中で今度は左右に揺れて跳ね、フキの胸から濡らしたが、フキは平氣だった。厨の水甕に手桶の水を空けるときは、中身は半分に残っていたが、フキは水汲みが楽しいのだから、遠い井戸から厨までの往復が何度になっても苦にならない。空になった手桶を片手で持って外へ走り出すと、明るい夏がフキを待っている。フキは井戸の屋根に茂る青草を見上げて、声をかけてや

りたかった。名もなく花も咲かせずに終るであろう雑草が、フキには夏の陽光を夥しく浴びている贅沢な生きものと思えた。祇園さんのお囃子は、この草にも聞こえるだろうか。聞かしてやりたいものだと思う。フキは釣瓶を井戸に落し、えい、えいと声をあげて引張り上げた。釣瓶も、手桶も、フキの鉢に較べるとひどく大きい。釣瓶についた綱は水で黴んでいて、フキの手首と同じ太さだった。使い古した手桶の方も、胴まわりはフキの鉢と似た大きさだった。水を盈たした手桶を抱え上げると、フキはまた走る。水はフキの心のままに跳ねて、フキの着ている布子を盛大に濡らした。

厨の大きな甕が一杯になるまでに、フキは川にでも落ちたように着ていた布子をぐしょ濡れにしてしまっていた。水汲みが終ると、フキは厨からまた外へ出て、素裸になり、脱いだ布子を絞った。粗い麻の布子から、かなりな水が滴り落ちた。陽光の下で、フキの裸身は輝くようだった。布子を陽に干している間、フキは鉢を小さくして乾くのを待っていた。フキは夏の布子は、これ一枚しか持っていない。照りつける夏の日で、布子から幽かな湯気のようなものが立ち昇った。老女が名を呼んでいるのが聞こえたので、フキは生乾きの布子を羽織り、紐を締め直しながら厨の中に駆けこんだ。

陽光の下に長くいたので、厨の中はしばらくまっ暗だった。下婢が立って、こちらを振り返ったのが、ようやく見えた。

「私、名ア呼ばれたんと違うん」

中年の下婢は、フキの大声に眉を顰めながら、たしなめるように低く答えた。

「観行院さんのお帰りやし」

「観行院さんて、誰や」

「御前の妹はんで、和宮さんをお産みなしたお方やないか」

「ああ、桂の御所から駕籠で来た人やな」

相手はますますフキの言葉遣いの粗さに辟易して、

「お召しやで。早う行き」

と言った。

「え、なんで」

フキは驚いて問い返した。この家で、お召しという言葉が使われるのは、橋本中納言実麗と妻のお静、養子の実梁と妻の幹子の四人で、フキはこの屋敷に来てから今まで、どの一人からも呼ばれたりしたことがなかったからである。

「なあ、なんで、私、呼ばれたんやろか」

「知らんえ。お次はんに訊いたらよかる」

主人側からの御用は直接老女が承り、フキたち二人はその命令で下働きをしている。その中立の老女をフキたちはお次と呼んでいた。そういえばフキの名を呼んでいたのは、お次だった。

「お次はん、何処に行ったん」

「お玄関やろ」

「玄関か」

フキは外へ駆けて、ぐるりと家を半廻りして玄関へ出た。門内で駕籠の戸が開かれ、観行院がそこに手をかけて乗りこむところであった。お次の老女はフキの姿を認めると観行院に囁きかけた。すると観行院は振向いてフキを見た。青白い肌、濃い睫毛、頬が殺げたように痩せている。美しいけれど、峻しい顔だとフキは思った。これがお局さんというものか。観行院の視線はフキ

に一瞬止まり、すぐ老女に視線を返して幽かに肯いたようだ。朱塗網代の駕籠の戸は下人の手で静かに外から閉きされ、六人の肩に担かわれて地上からすると浮き上り、悠々と門口を外に出て北に折れ、行ってしまった。万事質素な公家の家とはおよそ不似合な、けばけばしい色をした乗物であった。町方の駕籠とは色も形も違ちがっていて、牛車の上を担かぎものにしたような妙な形であった。

深々と頭を下げて見送った老女は、フキを振返ると、

「なんで土下座せなんだ。和宮さんをお産みなされた尊いお方やのに」と詰かった。

「お玄関で呼んでなざると聞いて飛出してきましたによって。ほなら、観行院さんがこちら見なさったんで、魂消たまげてしもうて」

「大きな声やの。ここは町方と違いますで。何度言うたら分るのえ」

「へえ」

「行儀を覚えなんだらお公家奉公は勤りまへんえ」

「はい。せいぜい覚えさして頂きますよって、御免なして」

「暮れてから桂の御所へ参るようにと観行院さまの仰せや。そのつもりでいいや」

「桂の御所いうたら石薬師御門の傍わきにある御殿でっしゃろ。何持って参じますん」

「お公家方では、訊き返すことはならぬ。行けと仰せあったなら、行けばよろしのや」

「へえ」

「暮れてからやで、よろしな」

「へえ」

「はいと言い」

「はい」

「退り」

フキは茫然として厨に戻った。いづどこで観行院がフキを見たのだろう。水を汲みに走っているところか。濡れた布子を脱いで、全身に陽を浴びていたときだろうか。桂御所が何処にあるか、フキは知っていた。フキが橋本家に奉公に出るより三月ばかり前に、和宮がこの家から観行院と共に移り住んだ御殿であった。

「なんやろ、観行院さんから桂の御所へ参るようという話やった」
年上の朋輩に言うと、水仕事の手を休めてフキの顔を黙って見ていた。少し驚いているようだった。

「なあ、なんやろな」

「さあよ、手エが足らんのと違^{ちが}うかいな。彼所^{あそこ}へ奉公に上るのは剣呑^{けんおん}やよって、誰も行きたがれへんのやろ」

「なんで」

「御前^{ごぜん}が毎日のようにお忙しゅう出かけなさる。お人が絶え間も無う出入りなさる。観行院さんは青い顔して来なさっては、御前とひそひそ話してはやばや帰らはる。これ見て、お前は何も分らんなんだん」

下婢は意地の悪い口調だった。

「なんのことやろ。私^{うち}、お公家はんに御奉公したん初めてやし」

「御公家奉公何年してたかて、こんなことは私かて初めてや。妙なこと起ってららしいえ」

「妙なことで、なんえ」

「宮さんを関東のお代官が、欲しと言ひ出したそうやし」

「ふうん」

フキには何のことか分らない。それと自分が今日、暮れてから桂御所へ出向くのとどういふ関わりがあるのか。関東の代官というのは誰のことか。宮さんを欲しいとは、どういう意味なのか、さっぱり分らなかつた。そんなことより、最前見たばかりの観行院のことが気がかりだつた。あれほど美しい女は町方の家ではおよそ見たこともなかつた。それにしても、どうしてあんなに青い肌をしているのだらう。眼許が黝んでいたためか、睫毛が濃すぎるせいとか、切長の眼であるのに黒い眸がことのほか大きく大きく見えた。それに、あの乗物はどうだらう。数人の男に担がれて行つてしまつたが、観行院という人はどこへ出かけるのもあのように仰々しい駕籠に乗るのであらうか。桂御所など、歩いてつい先にあるところなのに。

夕食の後始末をつける頃には暮れていた。お次が下方へ顔を出したときフキが小腰をかがめて、
「桂の御所へ行て参じます」

と挨拶をすると、老女はまた眉を寄せて、

「大きな声やの。桂の御所でそないな行儀ではあかへんえ」
と言つた。

「へえ、いえ、はい」

何を届けるのか訊きたかつたが、訊くとまた叱られるから、頭を下げて素手で外へ出た。橋本邸は、禁裡のすぐ東に居並ぶ公家屋敷の中ほどにあり、北隣は日野西殿、南隣は七条殿の御屋敷である。もちろんフキは裏口から外へ出たから、向いは柳原殿の表口で、その北隣は園家であつ

た。どの公家屋敷も小さく静まり返っていて、祇園会ぎおんえの準備をしている町方の家々とはまるで違っていた。どの屋敷でも、奉公人はやはり大声を出すのを禁じられているのだろうか。もっともフキが前に働いていた室町の染物問屋と違って、公家といってもこのあたりは家は小さく、庭も狭く、奉公人の数にしても町方の問屋とは較べものにならないほど少ない。持明院殿を左に、右に富小路家を見て、さらに北に上ると西が飛鳥井殿で向いが准后じゆんこうお里御殿、どちらもこれまでの公家屋敷と違って地所も広い上に立派な御殿が塀を越して見える。准后お里御殿の北隣が桂御所なのだから、橋本邸から歩いてなにはどの距りもない。しかし桂御所は敷地の広さが、普通の公家屋敷の数倍ほどもあろうか。御殿も大きくて棟数が大層多いようだった。表の御門から訪うなどフキには思いもよらないことだから、奉公人の出入口らしい木戸をそっと叩くと、

「誰や」

と男の声で、中から開けたのは下人であった。

「橋本の中将様の小者でござります。観行院さんのお召しにようて参りました」

吃どもりがちに言うと、相手は待っていたらしく、すぐフキを中に入れた。

樹木が多くて繁っている。邸内は暗く、俄かに夜になったような気がした。通りを小走りできたせいか下人の後についてゆっくり歩き出すと、自分の胸の動悸が聞こえてくるようだった。公家屋敷の静かなのによりやく馴れてきたフキであったが、御殿や御所というところになると、さらに一層深く静かなのかと驚いていた。聞こえるのは前に行く下人とフキ自身の足音ばかりだ。

植込みの繁みの彼方に、小さく灯火が輝いていた。フキは、ほっと一息ついた。どこまで行くのか、気が遠くなるほど心細い思いで歩いてきたからだ。下人は、その明りの近くに来て、地に膝をつき、ぼそぼそと何か呟いた。